

嗅覚測定法による処分場周辺環境臭気調査結果について（概要）

- 1 測定地点：図1(裏面)のとおり
 2 各地点における臭気の発生状況についてまとめると、概略は次のとおりであった。

測定地点	臭気強度	臭気の質	頻度	臭気指数 (日最大値)	悪臭苦情の原因 となる可能性
A地点	0のデータはなく、1のデータが圧倒的に多い。すなわち、非常に薄いが何らかの臭気が環境のベースとして存在しているといえる。大気が比較的安定のときに、微風により臭気が漂ったためか1.5～3.5のデータが数点測定された。	青草臭のデータが圧倒的に多く、この臭気が環境臭気といえる。臭気強度1.5のときは豚小屋臭で、3.5を感じたときはB地点で感じる臭気と同様の油様臭であった。	殆ど臭気強度1が測定された。それ以上の値はまれである。測定されても、瞬時であり、2～3秒程度で消える臭気であった。	一日の中で最もにおうとされた試料の測定値が10未満と12であった。	青草臭で、殆ど認知困難な臭気が一月中漂っている状態である。大気の安定度が高く、たまたまB地点の臭気が強いつきに、微風による影響のためか、瞬時に臭気を感じる程度なので、悪臭苦情は発生しないといえる。
B地点	A地点ほど圧倒的ではないが、1以下のデータが多い。1.5のデータが比較的多かった。	A地点と同様に青草臭が環境臭気となっている。臭気強度が1.5以上のときには豚小屋臭も感じていることもあるが、C地点での臭気の質と同様の場合が多かった。	臭気強度1.5以上の臭気が1時間以上継続している状況もあった。	11～14であり、大多数の人は不快感をもたないが、もつ人も存在する可能性のある臭気が時折発生しているといえる。	苦情が発生する可能性がある。
C地点	2～3のデータが多く測定されている。大気が安定している時に3.5が測定されている。上流の貯留池からの放流水の有無、大気の安定状況が測定値に影響をあたえている様子が見られた。	多種の臭気が頻繁に変動して複雑な状況である。こげ臭、沼沢臭、油様臭、ちゅうかい臭、金気臭、下水臭、腐敗臭が混合した臭気であった。時折、豚小屋臭を感じた。	臭気を強く感じる時間は長時間にわたっている。殆ど一日中感じているといっても過言ではない。	18～26であった。殆ど16以上のデータであり、現場で感知した臭気強度は2～3.5であった。すなわち、楽に感知出来るしまう臭気であった。	現場では臭気強度2～3の臭気が主として漂っている状況が多いので、苦情が発生する可能性はB地点より高い。
D地点	殆ど0～1のデータである。1.5のデータも2点測定されているが、環境の臭気レベルが低いので、比較的薄い臭気でも敏感に感じているとも考えられる。	殆ど無臭の状態といえるが、大気安定の状況により豚小屋臭を感じることもあった。(臭気源での作業状況による影響もあると思われる)	臭気を感じても瞬時に消え、長時間は継続しない。	10未満と11と低い値である。この測定値は一日で最もにおった試料の測定値であることから、生活環境へ影響は殆ど生じないといえる。	苦情が発生する可能性は非常に少ない。しかし、微風で曇天、小雨など大気安定度が比較的安定のときに豚小屋臭を感じたことから、それに起因する苦情が発生する可能性はないとはいえない。



図1 処分場周辺環境臭気調査地点